

聖書：ローマ9：1～5

説教題：パウロの大きな悲しみ

日時：2016年1月10日（朝拝）

今日の9章から後半に入ります。一般にローマ書は内容的に1～11章までと12～16章までに分けられ、それぞれは「教理篇」また「実践編」と位置づけられます。すでに私たちは8章で前半の一つのクライマックスを見ましたが、とするとこれからの9～11章は何を語る部分なのでしょう。それは「イスラエルの問題」です。特にイスラエルの不信仰の問題です。パウロは1章16～17節で「福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって救いを得させる神の力」と言いましたようにイスラエルの優先性を認めています。神のみことばはまずイスラエルに語られ、次に異邦人に語られました。新約聖書の福音は旧約聖書に基礎を持ち、旧約聖書が指し示す祝福を伝えるものです。とすると一つの問題があります。それはこれまで約束を受けて来たユダヤ人が皆、この福音を受け入れ、その祝福にあずかっているなら良いのですが、実際には彼らの多くが福音を受け入れず、キリストの教会に連なっていません。であるならどういう意味で福音は旧約との連続性の上に立っていると言えるのでしょうか。ユダヤ人に与えられてきた約束は無効になったのでしょうか。ユダヤ人は救われないのでしょうか。このことは神は真実でないということにもなるのではないのでしょうか。またこれはイスラエルの問題だけでは済まないことになり、今、福音を信じている私たちもやがて神の恵みから落ちるかもしれないということの意味するのではないのでしょうか。ですからこのテーマに関することも、神の福音の解説には欠かせないことになります。このことを通しても私たちは神の福音をより良く知るように導かれるのです。そしてこのことも12章以降で見る実践的な勧めの土台となることなのです。

まず1節でパウロは「私はキリストにあって真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。」と言います。これはキリストと聖霊の名を引いて来ての誓いです。パウロはこのことをしてでも、これから語ることを読者たちに良く受け止めてもらいたいと思っている。その内容は2節にありますように「私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。」というものです。パウロは8章で「勝利の歌」を歌いましたが、そんな彼には「大きな悲しみ」と表現されるほどの圧倒されるような悲しみもあった。私たち

は歯が痛くなるとズキンズキンとして何をしていても繰り返し襲って来る痛み
に悩まされますが、そのように「絶えず痛みがある」と言わずにいられないよ
うな痛みを感じ続けていた。一体それはどんな悲しみ、痛みだったのでしょうか。
それが同胞ユダヤ人の不信仰に関することでした。

パウロがどんなに同胞、同国人のことを思っていたかは、3節に「もしできる
ことなら、わたしの同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから
引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。」という言葉に
現わされています。彼が言っていることは、自分は彼らの代わりに呪われた
者になってもいいということです。彼らと入れ替わりに自分が捨てられ、永
遠の滅びに投げやられてもいい。そのようにしてでも彼らが救われること
を選び取りたいということです。これはパウロが本当にこの祈りを祈ったとい
うことではありません。彼はこの祈りは聞かれないことを知っていました。8
章38節39節で彼は「何ものもキリスト・イエスにある神の愛から私たち
を引き離すことはできません！」と語ったばかりです。ここでもパウロはこ
の願いを「願った」とは言っておらず、「願いたい」と言っています。つまり
この祈りは現実には聞かれないものだということを彼は知っていた。もちろ
ん、どうせ聞かれないんだからと安心して、このような言葉を偽善的に語
っていたわけではありません。彼の心としては純粹にそう思っているのです。
それができないことは分かっているが、もし可能なら本当にそうなっても良
いと私は心から思っていると。

果たしてユダヤ人はそんなにパウロにとって魅力的な人たちだったでしょ
うか。むしろユダヤ人はパウロの宣教をいつも妨害し、彼を常に迫害した
人たちでした。パウロは新しい土地に行くと、まずユダヤ人の会堂で宣教し
ましたが、彼らは決まってパウロを迫害し、町から追い出し、その命を付
け狙いさえしました。パウロはルステラではユダヤ人によって石で打た
れて瀕死の状態となりました。またⅡコリント11章にはユダヤ人から39
のむちを受けたことが5度あるとも書いてあります。こんな彼らに対して
は同胞の愛などつくの昔に消え去っていてもおかしくありません。むしろ
怒りと憎しみと苦々しさに包まれて、彼らが滅びるのは当然だ！と言
い放つても良い。ところがパウロは彼らのことを思って大きな悲しみと絶
えざる痛みでその心を一杯にしていたというのです。そして彼らの代わり
に自分が滅びても良いとまで言っているのです。

このパウロの言葉を見る時、私たちが思い起こす人がいるでしょう。それはモーセです。出エジプト記 32 章 31～32 節：「ああ、この民は大きな罪を犯してしまいました。自分たちのために金の神を造ったのです。今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら、——。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」 彼も自分に逆らい、主に逆らうイスラエルのために、自分の永遠の運命と引き換えにすることを願いました。私たちはこのような記事を読む時に非常な衝撃を受けます。そして私たちもそこまでしなければならないのだろうかと思惑します。しかしここにダブって見えて来るのは何と言ってもイエス・キリストのお姿でしょう。主はまさに私たちの代わりにのろわれた者となり、そのいのちを十字架上でささげてくださいました。またこの犠牲的愛は父なる神のお姿をも私たちに思い起こさせます。神は私たちの救いのためにご自身の最愛の一人子まで惜しまずにささげてくださいました。モーセもパウロも、このような神との交わりに生きていた者として、失われている魂に対して、神とキリストを映し出すような思いを持つ人となっていたのです。

私たちは周りの人々に対してこのような重荷を感じているでしょうか。私たちは信仰を持っていない多くの人と一緒にこの世で生活していて、肉の目で見ると、お互い何も変わらないように見えるけれども、実はこのままでは永遠の行き先が全く違うということを知っています。イエス様はある箇所で言われました。「あなたがたに言うが、その夜、同じ寝台でふたりの人が寝ていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。女がふたりいっしょに臼を引いていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。」 地上で同じ釜の飯を食べ、一緒にテレビを見、遊び、アハハと笑っているのに、そのままではやがての日に全く異なる運命に行きつこうとしている。そのことを見ているのがクリスチャンです。そのことを知っているなら、私たちは人々と色々なことを一緒に行なって楽しむけれども、ただ一緒に喜ぶだけでそれ以外は何も感じないということはありません。心の底では同時に悲しみも覚えている者でなければなりません。そしてもしそのことを思っているなら、私たちは何とかしてその人々の救いのために仕えなくては！と駆り立てられるでしょう。その思いを、このパウロやモーセの姿を通して新たに自らも持つ者に導かれたいと思うのです。

さてパウロのユダヤ人に対するこの感情は、単に同国人であるという自然的な絆によるだけのものではありませんでした。彼の嘆きを一層深いものにしていたのは、ユダヤ人が歴史において多くの特権にあずかって来た人々であるという事実でした。4 節と 5 節でパウロはユダヤ人が神から受けた様々な特権を列挙しています。まず「彼らはイスラエル人です」とあります。ユダヤ人ではなく、「イスラエル人」と言ったのは、パウロが神の救いの歴史という観点から彼らを見ているからです。すなわち彼らは神の民イスラエルとして、旧約時代から神との特別な関係の中で導かれて来た人々です。次の「子とされること」も神との特別な関係を指すものです。主ご自身が「イスラエルはわたしの子、わたしの初子である。」と言われました。誰でも自分の子どもは特別な愛で愛します。主はそのようにイスラエルを取り分け、特別な民として愛し育てて来られました。次の「栄光」はイスラエルが経験した多くの神の臨在のことを指しているのでしょう。昼は雲の柱、夜は火の柱となって彼らを導かれた主の栄光をイスラエルは見ました。またシナイ山では全山が煙り、火の中であって主が山の上に降りて来られました。また会見の天幕には主の栄光が満ちましたし、神殿奉獻の時もそうでした。また彼らには「契約」が与えられました。この「契約」は複数形で書かれていますから、アブラハム契約、モーセ契約、ダビデ契約といった、歴史が進むごとに順次新しく更新された神の契約を指しているのでしょう。そのような尊い一連の契約を彼らは与えられて来ました。また「律法」も与えられました。神はどのような方であり、何を喜ばれるかを彼らはこれによってわきまを知ることができました。また「礼拝」も彼らのものでした。異教の人々は自分勝手に作った神を自分勝手な方法で礼拝していましたが、イスラエルはどのようにまことの神を礼拝すべきかを教えられ、またその礼拝を通して神は彼らに確かに出会って下さいました。また「約束」も彼らのものでした。すなわちメシヤに関する約束です。また「先祖たち」も彼らのものでした。アブラハム、イサク、ヤコブ、そして 12 部族の祖となる族長たち。彼らを通して神の祝福はイスラエルに与えられたのであり、彼ら先祖として持つことは祝福のしるしでした。そして最後に一番重大なことがあげられます。それは「キリスト」です。このキリストは「人としては彼らから」、すなわちユダヤ人から出ました。これは彼らにとって最高の特権です。それまでのすべての特権は、この最高の特権に向けて備えられて来たものと言えます。この方は人としては彼らから出ましたが、その本質は神であることが 5 節最後に記されています。「このキリストは万物の上にある、とこしえにほめ

たたえられる神です。アーメン。」　この方が人となり、メシヤとなって、彼らユダヤ人から出た。これこそ彼らに与えられた最も偉大で、そのクライマックスに当たる特権でした。ところが何とイスラエル人はこの方をミスした！認めそこなつた！受け入れなかった！すべてはこの方を迎えるために導かれて来たのに、彼らはこの特権の頂点が与えられた時にこれを拒絶した！これがパウロの大きな悲しみの原因だったのです。これではいかにイスラエルであっても救いにあずかることはできない。

そしてパウロのこの悲しみと痛みの感情を強めたのは、これでは神の真理はどうなるのかという問いでした。神は長い歴史をかけてずっとこの時のためにと備えて来たのに、イスラエルがこのように拒絶したのでは全部無駄になってしまうのか。神がここまで準備して最後に与えてくださったものが、このように捨てられて終わりになって良いのか。その目的が達成されないまま、ユダヤ人が捨てられ、異邦人にだけ祝福が回って来るということで良いのか。そのことがこのあと 11 章最後にかけて取り扱われて行きます。今日はそれを前もってまとめて述べることはしません。少しずつ見て行きたいと思います。そしてそこに「神の福音」を構成する貴重なメッセージを私たちは学ぶことができるのです。

私たちは今日の箇所からどんなメッセージを受け取ったら良いでしょうか。神はイスラエルをそれ自身のために選んだのではなく、イスラエルを通して全世界を祝福するという計画のもとにイスラエルを選び、導いて来られました。ですからイスラエルの歴史は、世界のすべての国の人のための歴史でもあります。私たちが学ぶことは、神は長い歴史と時間をかけて救い主を送るための準備をして来られたということです。そしてイスラエルに与えて来られた様々な特権のクライマックスとして、ついにキリストをお与えくださった。ですからこのようにしてついに与えられたお方以外には、もう救いはないのです。この歴史において示されて来た神の啓示の頂点であるお方を退けるなら、もう他に神が下さる救いはないのです。このキリストは今や全世界のすべての人に差し出されています。誰でもこの方を受け入れるなら救いを自分のものにすることができます。私たちがパウロの思いを持って歩む者へ導かれたいと思います。神がついに与えてくださったキリストを心から尊び、感謝し、周りの人々の救いのために心を砕き、機会を見いだして私たちの言葉と生活を通して神の福音をあかしし、愛する方々の真の祝福のために仕える歩みへ導か

れたいと思います。